

## 地域発、ご当地検定で 知名度アップと活性化を図る



佐藤 義興  
あそ  
阿蘇市長(熊本県)



中村 勝治  
さかい  
境港市長(鳥取県)



北口 寛人  
あかし  
明石市長(兵庫県)



大豆生田 実  
あしかが  
足利市長(栃木県)

司会・コーディネーター

細川珠生

政治ジャーナリスト

空前の検定ブームの中、地方都市に関連した「ご当地検定」が増えています。観光ガイドに準ずる資格として位置付けられているものから歴史や文化、特産品、名産品にテーマを絞ったものなど、多種多様。まちの知名度アップや観光PRなどにも大きな効果があるといわれています。

今回の座談会では、ユニークなご当地検定の実施で知名度のアップ、地域活性化を積極的に進めている大豆生田実・足利市長、北口寛人・明石市長、中村勝治・境港市長、佐藤義興・阿蘇市長にお集りいただき、検定の概要や実施にあたっての工夫、今後の展望などについて、幅広くお話しいただきました(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)。

合格者には、市内の名所旧跡をガイドする役目を引き受けてもらえれば。



大豆生田 実  
足利市長(栃木県)

**検定実施に至った経緯と目的は**

**細川** 住民たちがまちへの愛着を深めたり、観光振興・地域活性化につなげたりと、さまざまな効果が期待される「ご当地検定」。平成15年の「東京シティガイド」、翌年の「京都・観光文化検定」などを先駆けに、全国的に増えています。それでは、各都市ではどのような経緯でご当地検定を行うに至ったのか、その理由や狙いについてお話しください。

**大豆生田** 足利市は、室町幕府を開いた足利尊氏の祖先が支配した、足利氏ゆかりの地。非常に歴史のある都市です。市内には、室町時代の歴史文化はもとより、日本最古の学校

など、数多くの観光資源があります。観光地としても名高く、現在も年間1800万人から1900万人の方がこの地を訪れます。私などからすると阿蘇地域は、まさに地球の原点のような地域性を持った、非常に美しい土地だと思っています。

「阿蘇まるごと検定」は平成19年から域内の市町村はもとより、関係機関を含め約30もの団体が連携して実施しているご当地検定です。阿蘇の自然をはじめ、歴史、文化、観光、トピック問題を課題としています。

目的は、平成23年3月の九州新幹線の全線開通を前に、阿蘇地域の情報を幅広く発信すること。さらには、「地域のもてなしの心」の向上も図っていくことです。

**受験者を増やすための工夫**

**細川** ありがとうございます。各都市から、ご当地検定を行う目的、理由をお話しいただきました。もちろん、それぞれの目的を達成するためには、多くの受験者を確保しなければなりません。受験者を増やすために工夫していることがございましたら、お話しください。

**北口** 「明石・タコ検定」の特徴は、県外からの受験者が多いということ。約4分の1を占めます。われわれとしても、検定と同時に明石の美味しい魚を楽しむイベントを開くなどして、訪れやすい、受験してもらいやすい環境整備に努めています。

また、話題づくりも大切です。第2回の検定時には、PRに一役買いたいと、私も含め、市の幹部職員がこぞって受験しました。開催

といわれる史跡足利学校など、数多くの文化遺産が現存しています。しかし、これまでこれらの貴重な資源がなかなか有効に活用されてこなかった。その結果、観光客も思うように増えない状況が続いています。

そのような中、危機感を感じた商工会議所を中心に、足利市を積極的にPRする手段の一つとして、平成19年から始められたのが「足利ふるさと検定」です。

**北口** 明石市では、平成13年夏に歩道橋事故、その半年後には砂浜陥没事故が発生しました。立て続けにこのような痛ましい事故が起きたことで、当時はまち全体が重苦しい雰囲気になっていました。

そのような中で平成15年に市長に就任した私は、何とか市民にまちに対する誇りや愛着、さらには失われた元気を取り戻してもらいたいと、明石市の特色を生かしたユニークなまちづくりを展開しようと考えました。

幸いなことに本市にはさまざまな資源がありますが、中でも私たちが着目したのは「魚」でした。明石鯛、明石タコなど、古くから魚のブランドで全国的に知られてきた地域性を生かして、平成15年には「魚を楽しみまち宣言」を行い、市民や関係機関と連携して各種取り組みを始めたのです。

平成18年から始めた「明石・タコ検定」もその流れの中で行われた取り組みの一つ。タコ

地の市長というプレッシャーはありましたが、私は何とか合格することができました。ただ、受験した幹部の何名かは残念ながら不合格でしたが(笑)。

**中村** われわれの検定も、明石市と同様に、市外からの受験者が多い検定です。これまでの検定で、受験者がいない都道府県はわずかに2県。ほとんどの地域の方が受験されています。鳥取県以外では、特に東京、大阪など、大都市の受験者が多いですね。受験者の年齢層も5歳から71歳までと非常に幅があり、水木先生のファン層がいかに広いかを実感させられます。

今年の検定では、これまでにない初めての試みを行います。境港市だけではなく、水木

PRに一役買いたいと、私も含め、市の幹部職員がこぞって受験しました。



北口 寛人  
明石市長(兵庫県)

に限らず、明石にかかわる魚全般を対象に、毎年検定試験を行っています。

**中村** 漫画家の水木しげる先生の出身地である境港市では、平成5年から水木先生が描く妖怪たちを積極的にまちおこしや商店街の活性化に活用してきました。中でもユニークなのは、駅前から800m続く「水木しげるロード」。通りには134体の妖怪のブロンズ像が設置され、まちの観光スポットとなっています。

ハード整備はもちろん、地域イベントも多く実施するなど、妖怪にちなんだまちづくりを継続的に行った結果、やがて知名度も上がり、現在では鳥取砂丘を超える県内一の観光地となりました。年間約172万人もの観光客がいらつしやいます。

「境港妖怪検定」は、このような流れの中で、平成18年度から開始した事業です。日本各地に伝わったさまざまな妖怪たちについて、水木先生の妖怪考察を通じた問題が提起されま



す。全国から多くの水木ファン、妖怪ファンが検定受験のために試験会場がある本市を訪れます。

**佐藤** 阿蘇市を含め、1市3町3村から成り立つ阿蘇地域には、阿蘇山、カルデラ、希少植物、温泉、さらには自然と共に育まれた地域文化

ファンが大勢いる東京でも検定試験を行うことにしたのです。ありがたいことに、来年の3月末からはNHKの朝の連続テレビ小説で、水木先生の奥様の同名自伝を原作とした「ゲゲゲの女房」が放送されるなど、新たな話題も豊富です。さらにこの検定を全国にアピールしていければと思います。

**大豆生田** なるほど。「境港妖怪検定」における水木しげる先生のように、地域ゆかりの人を前面に出した検定は、非常に魅力がありますね。足利市は、書家の相田みつをさんが生まれ育ち、さらには活躍されたまちでもあります。全国的にもファンが多い方ですから、もし検定を行うことができれば大きな話題になるはず。それがひいては本市の魅力のPRにもつながるでしょう。実現は簡単でないことは分かっていますが、早速、商工会議所に提案してみたいですね。

**佐藤** 「阿蘇まるごと検定」で、受験者を増やすために、当初から非常に力を入れたのはPR活動です。福岡や熊本などでPRキャラバン隊を実施し、新聞やテレビなどのメディアを中心に売り込みを行ったほか、チラシ配布やミニクイズなどを実施しました。

ほかにも、広報ポスターの作成・配布、公式サイトの上上げ・運営、PRバスの運行、関係市町村の広報誌などによる広報活動を行いました。そのためか、各メディアにも取り上げられ、効果的なPR活動ができたと思います。さらには、合格者への特典も工夫しました。合格証の発行のほか、観光施設への入館料の割引、温泉施設への優待割引、食品のサービスなどを特典として設けています。



### 九州新幹線の 全線開通を前に、 検定を通して 阿蘇地域の情報を 幅広く発信したい。

佐藤 義興  
阿蘇市長(熊本県)

のような雑魚は味もいいし、栄養も豊富。そのことを多くの人に知ってもらいたいですね。海洋国の日本にとって、漁業振興は本市だけの問題ではありません。漁業を守り、魚文化を全国で守っていくために、この検定が微力ながら役立てればとも思います。

**中村** 検定がもたらす効果は、単に地域の活性化だけではない。日本全体にも非常に良い影響を与えるということですね。私もそのご意見に賛成です。

妖怪検定に関しても同じことが言えます。妖怪の世界とは、日本の風土や文化そのもの。妖怪の持つ畏敬の世界的素晴らしさを全国の

か対応していきたいですね。民俗学的にも非常に難易度の高い、解き応えがある問題を出していかねばならないでしょう。

**佐藤** 「阿蘇まるごと検定」においても、「阿蘇の達人」という公式のテキストブックをつくって、書店などで売り出しています。これをベースにしながら、中にはテキストブック以外からもタイムリーな問題を出題していますが、合格率は第1回目92・2%、2回目64・4%です。いきなりハードルを上げてしまうと、挫折する人も多く出て、検定自体がなかなか定着していかない。やはり合格率をどの程度に設定するか、非常に頭を悩ませる問題です。

人に知ってもらうことは、とても意義あることです。その意味でも、合格者には、妖怪の知識を通して、日本の風土や伝統について積極的に話していただきたいと考えています。

**行政のスタンスについて**

**細川** 昨今、都市経営において市民との協働が非常に重視されていますが、検定においても、市民や民間の協力が重要になってくると思います。検定をうまく定着させるために、行政としてはどのようなスタンスをとっていくべきでしょうか。

**大豆生田** 既に申し上げたように、この検定は商工会議所発案の事業です。民間主導の取り組みのため、われわれが前面に出ることは避けたいですね。ただ、側面からのサポートは積極的に行いたいと考えています。例えば、市の歴史文化に関することでも、われわれは文化課が蓄えてきた多くの資料やデータを持っています。問題作成も含めて、さまざまなお手伝いなどできると思います。

**北口** この「明石・タコ検定」を担っているのは、TMO(まちづくり会社)が運営し、商店街の代表らが参加する明石・中心市街地まちづくり推進会議。民間のまちづくりのリーダーたちが中心になって企画、運営しています。これまでの検定に関しても、試行錯誤をしながら、一つずつ課題を乗り越え、軌道に乗せてきました。検定は申込者数、受験者数、マスコミの反響など、ダイレクトに、その反応・結果が分かる取り組みです。その分、非常にプレッシャーはありますが、検定を通して、皆さんの実行力や企画力などが高められたのではな

行政は、行政でなければできないことに注力すべきですね。われわれにとって、それはハード整備でした。これを基にして、地域イベントや催しなどさまざまなソフト事業が行われますが、これは民間が中心となって実施しています。水木しげるロード沿い商店による店舗内のトイレ開放や、市民ボランティアによる清掃活動など、それぞれの立場で鬼太

者も運営側も楽しんで行うべきとも考えています。肩ひじ張る必要なんてありません。行政がかかわると楽しく行うべき行事も、どうしても固くなってしまふ。だからこそ、深入りし過ぎるのはよくないのではないかと考えています。

**中村** これまで本市では10年以上にわたって、妖怪を活用したまちづくりを官民一体となつて進めてきましたが、官には官の、民には民の、ボランティアにはボランティアの役割があると感じています。

いかと考えています。その意味では、民間主体で行ったこと自体が、非常に意義深いことだったのではないかと考えています。また、話は変わりますが、私はこの検定は、資格試験のような堅苦しいものではなく、受験



また、話は変わりますが、私はこの検定は、資格試験のような堅苦しいものではなく、受験

### 検定成功のカギは合格率の設定

**細川** 検定に限らず、試験はそれぞれレベルや難易度が異なります。どのくらいのレベルにするかで、その試験の位置付けや性格も変わってくるでしょう。各都市ではこの点について、どのように工夫されていますか。

**北口** やはり合格率をどの程度に設定するかが、検定がうまくいくかどうかの非常に重要な要素になります。「明石・タコ検定」は公式のテキストを中心に、トピック的な問題を加えて出題するのですが、当初はまったくの手探り状態。試行錯誤で進めざるを得ませんでした。第1回目の合格率は83・4%と妥当なところに落ち着きましたが、2回目は34・3%。難易度が急に上がってしまいました。3回目はまた60%台、4回目は50%台と、そのたびごとに変動してしまっているのが現状です。

**大豆生田** 「足利ふるさと検定」は3級と2級の2種類。明石市同様に公式問題集や参考資料などを基に出題します。

基本的に3級は合格しやすく、2級は難解にと考えていましたが、3級の合格率は90%を越え、2級は1・6%と、極端な結果になってしまいました。3級の場合はこれで構わないと思いますが、2級はハードルを高くし過ぎましたね。これをどうするか。今後の懸案です。

**中村** 「境港妖怪検定」では現在のところ初級、中級試験を行っています。テキストはレベルごとに2種類用意しています。合格率は、初級は約82%で、中級は約17%です。

早くも中級の合格者から上級試験をぜひひとつくってほしいとの要望が出ているので、何と

### 妖怪の世界は、 日本の風土 そのもの。 その素晴らしさを 知ってもらいたい。



中村 勝治  
境港市長(鳥取県)

か対応していきたいですね。民俗学的にも非常に難易度の高い、解き応えがある問題を出していかねばならないでしょう。

**佐藤** 「阿蘇まるごと検定」においても、「阿蘇の達人」という公式のテキストブックをつくって、書店などで売り出しています。これをベースにしながら、中にはテキストブック以外からもタイムリーな問題を出題していますが、合格率は第1回目92・2%、2回目64・4%です。いきなりハードルを上げてしまうと、挫折する人も多く出て、検定自体がなかなか定着していかない。やはり合格率をどの程度に設定するか、非常に頭を悩ませる問題です。

### 合格者に期待したいさまざまな波及効果

**細川** 検定に見事合格された方に対して、市として望まれていること、期待されていることがございましたら、教えてください。

**大豆生田** 合格者には、市内の名所旧跡をガイドする役目を引き受けてもらえれば、と考えています。そうすれば、まち全体のおもてなしも向上するでしょう。まだ、市として観光ガイドやボランティアの人材バンクなどの仕組みも設けていませんが、今後は検討してみたいですね。

**佐藤** 本市でも現在のところ、観光案内を担うボランティアの仕組みはつくっていませんが、合格した方々がその役割を担ってほしいと思います。合格者がみんなで自発的に集まって、勉強会、交流会などを行い、観光の専門家が育っていく。そんな機会も増えてほしいですね。

**北口** 魚の知識が豊富な人々が増えることで、観光振興だけではなく、漁業振興も期待できるのではないかと考えています。魚の消費量が年々落ちているといわれている昨今ですが、その原因の一つは、魚に対する知識不足も関係していると思います。魚に含まれる栄養、効果などを知ること、魚の素晴らしさを再認識し、消費の拡大につなげられればと期待しています。

特に、心配なのは沿岸漁業です。従来なら、沿岸で捕れる雑魚も、まちの魚屋で売られ、普段の食卓に上ったものでしたが、現在では取引すらされない、値も付かないという状況です。しかし、食べてみれば分かりますが、こ



細川 珠生  
(政治ジャーナリスト)

郎のまちを支えています。今回の妖怪検定も含めて、行政は民間の取り組みをサポートしますが、細かいところまで口は出しません。あまり前に出過ぎないというのを、われわれのスタンスとしています。これまで成功してきた要因の一つは、ここにあるかなと思います。

**佐藤** 行政と民間のバランスも、その取り組みの段階によって、変わってくると思います。いきなりすべてを民間に委ねてもうまくいくとは限りません。われわれの取り組みに関しては、テキストブックの作成、キャラバン隊の実施などは、行政がある程度カバーしました。もしなければ、なかなか前に進んでいかなかったと思います。しかし、回を進めるごとに、次第に民間主体に移行していくことが必要だと思っていますね。

**地域活性化の一翼を担う存在に**

**細川** 各都市では、これまで数回にわたり検定試験を実施してきました。それを踏まえて、現在の課題や今後の展望についてお話しください。

**北口** これまで5回の検定試験を行ってきましたが、心配なのは、マンネリ化です。毎年同じような形態で行うと、どうしても新鮮味が薄れてしまいます。そこで、今年の10月に行う「達人編」(上級編のこと)では、水槽に入った魚を見て種類を答えたり、天然物と養殖物の食べ比べをしたりといった、これまでにない趣向で、出題したいと考えています。

**中村** 「境港妖怪検定」は、全国から注目される一方で、残念なこともあります。それは、地元受験者が少ないということです。妖怪検定では、合格者は「境港妖怪博士」と認められるのですが、ぜひ、地元から「境港妖怪博士」が一人でも多く出てきてほしいというのが念願です。特に、地域の商店街の方などにチャレンジしてほしいですね。訪れた店の店主がもし博士の称号を持っていたら、それだけで盛り上がるし、そこからコミュニケーションも広がると思います。

**大豆生田** 「足利ふるさと検定」は、逆に市民の受験者がほとんど。今後は市外の方にも受験してもらえそうな仕掛けを工夫したいと思っています。

さらに、今後は現在の3級、2級に加えて、上級編として1級も設ける予定です。それぞれどのくらいのレベルの問題にすべきか、合格率はどの程度にすべきかということを、全体を見据えながら、考え直さなければいけないと思います。

**佐藤** この2回の検定試験の結果、最も受験者が多かったのは50代、次いで60代、その次が40代。それ以外の年齢層はあまり受験されていません。次の世代を担う中学生、高校生など、若い

層に受験してもらいたいですね。阿蘇地域は、子どもを遊びに連れてくるのにも、同級生同士で遊びに来るのにも、カッブルで訪れるのにも一番いい場所。若い人たちに阿蘇地域の情報を発信し、そのよさを実感してもらい、阿蘇ファンを一人でも増やしたいですね。

**細川** ありがとうございます。本日のお話をお聞きして、私自身、ご当地検定についての認識を改めました。これまでは、検定とはその土地のことをよく知るための手段といった認識でしたが、まちづくりや活性化にも貢献するものだし、さらには日本の風土や歴史などを見つめ直す機会にもなり得る。非常に可能性の大きな取り組みだと分かりました。

これからもご当地検定を、まちづくりや観光PRに活用しながら、活性化を図っていただきたいと願っています。本日は、長時間にわたり、ありがとうございました。

(平成21年7月8日、日本都市センター会館にて実施) 本コーナーは隔月掲載となります。次回は来年1月号に掲載予定です。

